

シモーヌ・ヴェイユにおける問題としての実在 ——『重力と恩寵』を中心に——

浅井 聡

はじめに

1909年、モーリス・メルロ＝ポンティ、クロード・レヴィ＝ストロースと同世代に生まれたシモーヌ・ヴェイユの思索は、20世紀のフランス思想の華々しい業績と全く接触することはなかった。後世の幾人かの思想家たちが、その奇妙な思考に反応を示したのは事実だが、彼女自身、メルロ＝ポンティから影響を受けることも、レヴィ＝ストロースやジャック・ラカンの批判を受けることもなかった。また、ミシェル・フーコーやジル・ドゥルーズと共に闘うことも、ジャック・デリダと粘り強く論争することもなかった。ヴェイユの思想は、その方法においても、その内容においても、そして、その結論においても、斬新で、革命的な20世紀の思想家たちに比較すると、地味で、時代遅れですらあり、いかにもナイーブで、凡庸に見える。しかしながら、そうした見かけとは別に、哲学者シモーヌ・ヴェイユの思想に独特の推進力を与えるのは、師アランや師の師であるジュール・ラニョーから受け継がれた、問題そのものを解決しようとする断固たる意志、問題を決して迂回して解こうとしない非妥協的な姿勢である。理性主義の土壤に植えられ、反省哲学の生の価値への配慮を摂取して育ったヴェイユを突き動かしたのは、戦争と革命の暴力という不透明で直視に堪えない時代に、人間が何であり、何であることができるのかという素朴な問いであった。この問いを浮かび上がらせるのが、ヴェイユの思索を独特なものにし、先導する「実在 *réalité*」¹である。多層的で、難解な相貌を呈する「実在」を導き手としながら、「実在」と格闘する姿勢がシモーヌ・ヴェイユの哲学に他の思想家にない輝きを与える。思考が決して届くことのない闇に理性はどのようにして分け入りうるのか。そのためには、思考はどのようなものでなければならないのか、理性はどのように働くべきなのか。生とはどのようなものでなければならないのか。ヴェイユ思想の最大の特徴は、この問いを立て続けたことなのである。

一見すると、シモーヌ・ヴェイユの後期思想はグノーシス主義の図式の上で展開され、その著作は神秘主義的格言に覆われている。しかし、このスタイルが含んでいるのは、世界を悪として神と対置する二元論や人間と神、人間と世界との忘我的な融合ではない。表面的には神秘主義的に見える思考と文体を通じてヴェイユが試みているのは、不透明で堪え難い世界の深部にあるものに接近することであり、ありのままの姿で捉えることであった。人間の思考が透過しえないが、それにもかかわらず実在しているものを描き取ることが彼女のテーマであった。本稿では、『重力と恩寵』を中心として、この世界の奥に実在しているものをシモーヌ・ヴェイユの思想の自覚的かつ思想的な課題として描き出す。この時、世界の内奥の不透明で捉え難いが、実在しているものは、ヴェイユの哲学に与えられた単なる対象ではない。確かに、ヴェイユの思索は、「真理」や「絶対的な善」、「純粹さ」などの様々な名を与えられた超自然的真実を渴望し、目の前に広がる現実を涉猟する。しかし、シモーヌ・ヴェイユの思考と行動の中

核にある「実在」は、このような現実でない²。ヴェイユの思想と実践が意図するのは、ありありと存在している目の前の厳しい時代の現実に対処する術を見出すことではなく、世界、社会、自己の存在と存在の仕方を掴むことである。そのためには、繰り広げられる現実から出発して思考し、行動することが必要なのではない。世界や社会、人間の存在の超越的な意味と根柢がそこに潜む「実在」に迫り、「実在」に即して思考し、活動すること、つまり、「実在」を問題として引き受けることが必要なのだ。本論文では、シモーヌ・ヴェイユが「実在」を思想的な意味で意識的に問題化していること、「実在」を規定し、「実在」について解明しようとしていることを示す。

シモーヌ・ヴェイユの研究において、「実在」をその中心的課題とした研究は少ない。いや、むしろ、あらゆる研究は本稿で「実在」との関係で扱っているような問題を扱っている。しかし、「実在」についての体系的な記述をしているものは少ない。シルヴィ・クルティエヌ＝ドゥナミは、不透明な「暗い時代」とのシモーヌ・ヴェイユの暗闘を非常に生き生きと描いている。クルティエヌ＝ドゥナミは、「実在的なもの」を時代の病と捉え、診断・治療しようとする。富原真弓や今村純子は「目に見える世界」の背後にある目に見えぬ構造として「実在」を捉え、ここに到達するための詩的言語の創設を巡る問題を中心にシモーヌ・ヴェイユを読む。鈴木順子は、シモーヌ・ヴェイユの思想を救済のための失墜としての「犠牲」の概念の進化の軸に沿って解き明かしている。また、リサ・マクルーフは、「実在 reality」という言葉を用い、錯綜した現実と対峙する思想＝信仰としてシモーヌ・ヴェイユの思想を宗教的に描こうとする。ロール・アドレは、シモーヌ・ヴェイユを混乱と価値の墮落の時代に対する「貧しい人々のための闘争」と「純粋さの探求」に邁進した戦士として描く³。これらの研究はすべて尊敬すべきものである。本稿が成功したからといって、これらの研究の価値が減じるわけではもちろんない。本研究は、これらの研究で、部分的には扱われてきた「実在」に、一つの肖像を与えることを目的に展開される。

1. 「実在」の思想的ポジション

1-1 〈わたし〉を離れることと実在

シモーヌ・ヴェイユの思想全体を貫く根本的な態度は自我を嫌う態度である。鈴木順子は、シモーヌ・ヴェイユの思想を自己放棄の観念の発展の過程として描く。鈴木によると、とりわけ、ヴェイユはキリスト教と出会い、自らを死に引き渡す神の死に象徴される「犠牲」の概念に強い関心を寄せるようになった⁴。シモーヌ・ヴェイユは、スペイン市民戦争や工場での労働体験などを通じて、人間と社会が社会的矛盾や暴力から救われるためには、神が死に、自らを「犠牲」にし、また、人間が神に倣い、自我を放棄する必要があることを認識するに至った。このように、自我を放棄する態度は、ヴェイユの思想と活動の基礎であるということが出来る。また、村上吉男は人間から自我を奪い、その価値を無化する「不幸」の周囲に形成された思想としてシモーヌ・ヴェイユの思想を認識する⁵。村上は、哲学、科学、労働、宗教に関するヴェイユの思考を広く当たり、「不幸」による自我の喪失を受け入れる感受性が人間を神との接触

へと導いていくことに着目する⁶。彼によると、人間の思考や精神が摩耗し、無と化している時、愛の故に神が人間存在を支えるという超自然的な出会い、「恩寵」はここに存する⁷。村上は、こうした人間の精神・知性や思考を超えた超自然的な接触の「領域」を「實在」と呼んでいる⁸。ヴェイユ自身が認めているように、人間存在の根拠は人間の意識を超え出た領域にある。ここから、自我の放棄がヴェイユ思想の重要な基礎であること、自我を喪失した「真空」の「領域」において人間存在が支えられていること、そして、この超自然的な神の働きの「領域」が「實在」であるということがわかる。自我の摩耗と精神の死から人間存在が立ち上げられる超自然的な神の働きにシモーヌ・ヴェイユの哲学は基礎付けられる。

このように見ていくと、ヴェイユの思想において、人間存在の意味や価値は、人間の思考や知性の効果によっては把握されず、また「實在」との接触なしでは考えられない。自我を嫌う態度に立つことは、人間がもはや自分の力で生きていないような領域に一度下っていき、生全体をそこに根付かせることであり、自我がそこから排除された「實在」に限りなく接近して、そこから知と生を鍛え直すことである。人間の生と世界に対する認識が、個々人の主観や立ち位置に過ぎないものによってではなく、「實在」に基礎づけられるようにすることである。したがって、「實在」は単なる超自然的な「領域」を意味するものではない。「實在」は、どのような人間も包み、どのような人間にも触れている。「實在」は人間の人間の働きに先立って、自ら人間に働きかけているのだ。ヴェイユ本人すら、その例外ではない。そのため、シモーヌ・ヴェイユの思想において、「實在」が動き出す地点を確認することが必要である。このセクションでは、「實在」が自我への嫌悪に立つ思想のどこに立ち現れるのかを探求する。その時、出発点として二つの問いが必要になる。これらの二つの問いは、それに答える過程で、〈わたし〉がいかなる存在であり、人間存在がどこへ向かうべきであるのかを素描する問いである。

第一の問いは、〈わたし〉、つまり自我とはどのような生き方なのかということだ。シモーヌ・ヴェイユにとって、〈わたし〉とは、悪や幻想（見かけ上のもの）と密接に結びつき、神を見えなくしてしまう霧のようなものである。シモーヌ・ヴェイユは「自我とは、神の光を遮る罪と過ちによって投げかけられた影に過ぎず、わたしがそれを一つの存在であると思い込んでいくに過ぎないものである」⁹と〈わたし〉について述べる。この一文は、「自我」が必然的に罪の性質を含むこと、その罪故に自我が幻想に過ぎないことの二点を述べている。第一の点に関して述べると、〈わたし〉とは、ある人間が自身の権能を前提に世界を把握する人間存在のあり方である。〈わたし〉は、神が放つ光によって見える世界を受け入れない。もしくは、神が創造した世界の一部を頑なに自分に由来する、自分固有のものとして所有しようとする。この意欲だけが人間が生きながらにして手にしているものである。ヴェイユは「わたしたちはこの世で何も所有していない——偶然が全てをわたしたちから奪うことがあるのだから——〈わたし〉という力以外は」¹⁰と述べる。この時、第二の点が現れる。〈わたし〉は幻想である。しかも、どこまでも幻想である。ヴェイユは、「わたしのなかにある全てのものは、例外なくわたし自身とは別なところから来る。しかも、贈り物としてではなく、絶えず更新されなければならない貸与物として来る」¹¹とも述べる。〈わたし〉を主張することは、唯一人間に残された能力であるが、この能力すら神が人間に貸し与えたに過ぎない。よって、〈わたし〉が世界の全体、もしくは一部を自分のものとして感じている時、世界の所有によって存在を

満たされている〈わたし〉はもちろん幻想（見かけ上のもの）である。それだけに留まらず、たとえ無力な〈わたし〉であっても、〈わたし〉は幻想である。世界を所有することとの関係において、世界が〈わたし〉のものではないと感じる〈わたし〉も、未だに〈わたし〉を主張する力の圏内にある。したがって、「神」を拒絶する人間の意欲もまた、「神」から来たものである。人間は〈わたし〉を主張する時、幻想（見かけ上のもの）である。

第二の問いは、なぜ〈わたし〉を主張する生き方は嫌われなければならないのかということだ。この問いには、既におぼろげながら回答が成されている。まず一つは、〈わたし〉というあり方は、「神」を拒絶することだからである。確かに、ヴェイユの思想において、「神」の拒絶はあってはならないことであるが、一つの徴でもある。神の前での〈わたし〉は、常に罪を含み、その故に非存在的であるが、逆説的に〈わたし〉のもう一つの側面を明らかにしているように見える。その側面とは〈わたし〉の基底性である。〈わたし〉の存在の根拠は〈わたし〉の内部にないので、〈わたし〉の存在が少しでも残っている限り、自分の存在を〈わたし〉以前に遡って考えることができない。この〈わたし〉の基底性は人間の具体性に大きく寄与している。ヴェイユは「わたしが見たり、聞いたり、食べたりする全てのもの、わたしが会おう全ての人、わたしはそれらのもの全てを神との接触から引き離し、わたしの中の何かが〈わたし〉と言っている限りは、わたしはこれら全てのものを神との接触から引き離している」¹²と語る。この一節は二つのことを指す。一つ目は、〈わたし〉が見ること、聞くこと、食べることなど、〈わたし〉による世界との具体的な関わりは、「神」から世界を奪い取ろうとすることになるということだ。二つ目は、〈わたし〉のものとなってしまった世界が〈わたし〉を主張することを可能にするということである。個々の人間に固有な仕方、固有の状況下で世界に関わる〈わたし〉は自分にしか可能ではないような視点、姿勢から世界を見る。その時、〈わたし〉は具体的な仕方、世界を活用し、消費するが、同時に、この〈わたし〉の力の源泉は、具体的な生のなかで〈わたし〉が養分として摂取した世界そのものである。この点で、〈わたし〉の機能と〈わたし〉による神の拒否は、個々の人間存在に疑いようのない基底を据える。世界を〈わたし〉にしかできない仕方、食し、「神」に返すことなく所有し続けようとするような〈わたし〉の特殊性、具体性、個別性は「神」の拒絶に由来する。「神」を拒否することによってしか、〈わたし〉は世界のなかに場所を得られない。しかし、もう一方で、〈わたし〉を介する「神」の拒絶ですら、人間を養い、育てる人間存在に対する「神の愛」の徴である。

〈わたし〉の存在は「神」を拒絶することにあるだけではなく、「神」を拒絶することで人間が自らのための領域を確保しようとすることであり、このことは人間存在を棄損することでもある。では、〈わたし〉とは異なる人間存在のあり方とはどのようなものか。ヴェイユは〈わたし〉を欠いた人間存在の態度とは「謙虚」であることだと考える。「謙虚」であることは、自我は自らを自力で養うことができないことを認めることである。ヴェイユは、「謙虚さは〈わたし〉と名付けられているもののうちには、自らを高めることのできるエネルギーのいかなる源泉もないと知ることである」¹³と言う。〈わたし〉と呼ばれているもののなかには、人間を生かすことのできるもの、人間を価値あるものにするもの、人間を何一つない。そのように自己を認識しなければならない。しかし、それだけではただの諦念である。人間はただ諦めるのではなく、自己を満たすエネルギーを迎え入れる準備をしなければならない。彼女によ

ると、「エネルギーはよそから来なければならない。しかしそれでも、まず引き裂かれること、絶望的な何ものかが必要であり、まず真空が生じることが必要である」¹⁴。満たすエネルギーは「恩寵」として来るが、「恩寵」が来る時には「真空」がなければならない。「恩寵」は満たすが、それを受けるために真空があるところにしか入ることができない。そして、真空をつくるのは恩寵である¹⁵と彼女は言う。この一節は人間存在の「真空」と「恩寵」の二重底の構造を表している。「恩寵」と「真空」は一方が他方の条件であるわけでも、一方が他方の根拠になっているわけでもない。「恩寵」が人間に入り込むためには、「真空」は不可欠であり、「真空」を人間が自身のあり方として手にする時には、既に「恩寵」がなければならない。「真空」と「恩寵」は互いに並行して人間存在を織り成している。つまり、人間は自己の外部、自己以外の場所に生の根拠を持たなければならない。「謙虚」であることは、「真空」であれ、「恩寵」であれ、〈わたし〉のものではないものに身を任せることを受け入れることである。

以上を合わせて考えると、〈わたし〉は「神」の働きに起源を持つ人間存在と真っ向から対立する存在である。人間の存在は「真空」と「恩寵」を下敷きにして、「神」そのものが成立させる。先取りする形で述べると、人間存在とは、「神」そのものが、「神」のために、「神」によって成立させるものである。これに対して、〈わたし〉は、人間一人ひとりの個性を成立せしめ、「神」を締め出してしまふ。しかし、ここで人間の個性や互換不可能性が軽視されて良いわけではない。したがって、重要な問題が浮かび上がってくる。それは、〈わたし〉による恣意的で偶然的な個性を持つとするのではなく、「神」によって許されている存在の替えがたい価値が実現されるようにするにはどうすればよいか、ということである。

〈神〉がそうあるべきと定めた真の価値が実現されるためには、〈わたし〉を捨てなければならない。その方法は後に示すが、まず〈わたし〉がどこから力を得ているのか、〈わたし〉が自身の存在の重要性を信じ、それにしがみつこうとする傾向は何に起因しているのかを明らかにしておく。シモーヌ・ヴェイユによると、あらゆる人間の性質に由来する現象は〈わたし〉に活力を注入しようとするような傾向と能力がある。彼女は、〈わたし〉自身の存在への執着の原因は「本質的均衡への欲望」であり、「均衡」を求める時に用いられる「想像力」であると考える。「均衡」を求める心は、二つの方向への動きを示すが、二方向は「真空」と「恩寵」の二重底の構造の歪みに拠っている。一方では、人は既に手に入れたものにしがみつ、既に手に入れたものの不在を受け入れなくて済むように、「真空」の重要性を打ち消そうとする。この時、「自分が苦しんでいるまさにそのことに他人が苦しんでいるのを見たいと思う欲望」¹⁶の方向へと心が動く。ヴェイユによると、自身の感じている苦しみを他者に転嫁したいと望むことの効果は、「自分が大きくなった。自分が広くなった。他者のうちに真空を生み出すことで、自身の内なる真空を満たす」¹⁷ことである。つまり、自身のうちに、その存在の価値を充填してくれるものが不在であると感じる時、人間は他者の存在の重みを減じることを通じて、自身の存在の価値と他者の存在の価値の釣り合いを感じようとする。そして自分の存在と釣り合う他者の重さによって、自身の価値を信じこもうとする。かくして人間は「均衡」へと向かう。〈わたし〉の軽さに耐えかね、他者の軽さとの釣り合いを求めることは、「恩寵」は〈わたし〉のものではなく、「恩寵」が〈わたし〉の手から逃れていくことは全く不思議なことではないことを忘れ、がむしゃらに既に得たものを守ろうとすることである。したがって、「均衡」を求

めることは、「恩寵」に固執し、「真空」の価値を忘れることである。「真空」と「恩寵」の二重構造の歪みのもう一つの現れ方は、「恩寵」の時間的な前段階として「真空」を受け入れようとすることである。その時、人間は「真空」に耐え抜くとご褒美のように「恩寵」が与えられると考える。ヴェイユによると、「善行の（あるいは芸術作品を作った）後に得る自身の満足はより高次のエネルギーの墮落である。だから、右の手は知ってはならない……」¹⁸。善いことをしたという自覚による満足は、「報い」の取得へとエネルギーが収束してしまうことによる。善い行いのためにつぎ込まれたエネルギーが「報い」を受けることのために使い切られてしまう。したがって、「あらゆる形での報いが、エネルギーの墮落となる」¹⁹とヴェイユは述べる。〈わたし〉に存在の重さを感じさせるものが何らかの行いへの見返りとして期待される時、〈わたし〉がどれほど「真空」に近い状態であっても、〈わたし〉は自身の重さを感じていられる。将来の「報い」を受けるに値する〈わたし〉が自身の存在の重さと釣り合っているからである。この場合も人間は「均衡」へ向かう。以上のように、〈わたし〉に活力を与える人間にとって自然に思える人間心理の運動は、「均衡」の達成を志向して成される。そして、このように「均衡」を求めることは、人間存在の二つの底である「真空」と「恩寵」のどちらかを軽視しながら行われる。「均衡」を求める心は、自然的には人間の生に土台を与えているように見えるが、本来「真空」と「恩寵」によって超自然的に支えられるべき人間存在の価値を棄損し、人間を〈わたし〉の存在を可能にする世界や報酬の奴隷の地位へと突き落としてしまう。

自分が世界と自身の生の主人であるかのように思っていたら、知らないうちに見返りの奴隷になってしまっているような恐ろしい状況に人間を陥れるのは、「想像力」である。「想像力」とはどのような働きをするものなのか。一言で答えると、「想像力は恩寵がそこを通ってくるあらゆる裂け目を塞ごうと絶えず働いている」²⁰。「想像力」は「真空」を埋めるために最適の働きをする。しかし、「想像力」が何かを満たすというのは間違いだ。ヴェイユは「真空を満たす想像力は本質的にうそつきである。それは第三の次元を排除する。なぜなら、第三の次元にあるのは、実在するもの²¹だけだからだ。想像力は多様な関係を消す」²²と言う。「真空」状態である〈わたし〉を満たすために「想像力」が見つけてくるものは、〈わたし〉と同じ水準に属する。つまり、「想像力」は、〈わたし〉と〈わたし〉を満たすものに共通の「次元」でしか関係を形成することができない。「実在するもの」を排除してしまうのだ。ヴェイユによると、「純粹に想像上の報い（ルイ14世の微笑みのような）が、自分の費やしたものの正確に等価なものである。なぜなら、この報いは正確に、自分が費やしたものの価値を持つからだ。——そうであるがゆえに、多かったり、少なかたりする実在の報いとは反対に」²³。「実在」は〈わたし〉を満たすものではない。「実在」は、人間の費やしたものの補いや「報い」としては多すぎたり、少なかたりする。「実在」の存在は、人間が費やしたものに相対して決まるのではないからだ。したがって、人間が「実在するもの」に満足することができるとしても、「実在」は費やしたものに対する「報い」や補填であることはない。人間は自分が費やしたものと価値の釣り合うものを受け取ることで満たされる。だから、「想像力」によって満たされるためには、人間は〈わたし〉と同じ水準に属する、自らが費やしたものを穴埋めしてくれるものを要求する。その時、「報い」や補填は〈わたし〉を満たすものを〈わたし〉の周囲にか

き集める〈わたし〉の権能に支配された次元に属する。そこでは、基準となる〈わたし〉の属する「次元」が全てを支配している。〈わたし〉が満たされているか否かが〈わたし〉の状況が全てを決定する。全てが〈わたし〉による価値付けによって存在するのだ。「想像力」による「真空」の充足ということは、こうしたことである。「真空」を満たすというより、人間が費やしたものの穴埋めをするに過ぎない。したがって、「想像力」によって〈わたし〉を満たそうとする人間は、満たされたという錯覚を抱くだけで、満たされることはないのだ。しかし、「実在」は人間の自然的傾向の水準とは本質的に異なる「次元」にある。ここで問題なのは、人間が「恩寵」以外によって満たされることではない。人間が、「恩寵」を迎え入れるために必要とする本来満たされるべきではない「真空」を満たそうとすることである。「想像力」により「真空」から救われようとする人間は、「真空」を〈わたし〉の属する水準内で満たすべき、満たせるはずだと考える。しかし、このことは、「真空」を「想像力」で満たそうとすることで、〈わたし〉と〈わたし〉を満たすものが共に属する「次元」を一步抜けたところにある〈わたし〉の状況に左右されない「実在するもの」との関係を失ってしまうことにしかならない。「実在」は、それによって人間が満たされるか否かに関わらず存在している。「実在」は専らそれ自体によって、規定され、「実在」から遡ることのできる諸構成要素にこれを分解して説明することもできない。「実在の報い」が多かったり、少なかったりするのとは、そのためである。「実在」は、人間の人的働きに無関係に、無関心に、偏ることなく存在しているのだ。「実在」は人間に報いず、人間を補いもせず、あるいは人間を満たしすらしない。しかし、「実在」は確かにあり、「実在」に従って生きる人間を確かに「実在」の「次元」へと導く。そのため、「実在」に沿って生きることは「実在」を受け入れることである。人間の充足が断念され、絶望的になったところに止まり、人間存在を立ち上げる「神」から掛け値なく与えられる「恩寵」を待つというあり方に「実在」が表されるのである。

シモーヌ・ヴェイユに独特の力強さを与えているのは、自我を放棄すること、自我を喪失することである。〈わたし〉を満たしてくれそうな諸物を探し、〈わたし〉の周囲にかき集めようとする〈わたし〉の権能を自由にさせないことが重要だ。〈わたし〉は「真空」になるが、この「真空」があるところこそ、神が「恩寵」によって人間存在を成立させる。人間が「恩寵」を創り出したり、「恩寵」を自分のところに誘導したり、「恩寵」を自分のもとに止まったままにしたりすることはできない。人間にできることは、〈わたし〉を「真空」になるがままにしておき、「恩寵」が降り注ぐがままになるようにしておくことである。「想像力」によって「真空」を埋め合わせようとする自らを中心にして世界を占有しようとする〈わたし〉が無力であるところだけに「恩寵」がもたらされ、「恩寵」が降り注ぐところでは、〈わたし〉は死んでおり、人間存在は「真空」状態である。人間は、このように〈わたし〉の死である「真空」と〈わたし〉が死んだところに理由なくもたらされる「恩寵」が二重の底となって人間存在を成立させるという状況に止まり続ける必要がある。「実在」は、ここに表現される。「実在」は人間にとって、何ものでもない。人間にとっての何かであるために存在しているのでもない。しかし、人間は「実在」に接触しつつ生きる。その時、個々の人間は、「実在」を自らにとっての何かとして引き寄せ、消費しながら生きないようにしなければならない。「想像上の報い」に引き寄せられる〈わたし〉という傾向が「実在するもの」の構成する「次元」を排除してしまわな

いように。こうした人間に課せられる「実在」の前での義務は、人間の精神の発展やシモーヌ・ヴェイユの思想の進化によって到達された「領域」に属するものではない。「実在」は、いかなる意味でも人間に対象として提供されたものではない。しかし、「実在」は無ではない。「実在」は「実在」として、根拠なく、理由なく存在し、人間の生に触れ、これを構成する。人間の意志や能力、欲求に先立って、「実在」が存在し、人間を包み、巻き込んでいるのだ。「実在」は「真空」と「恩寵」が織り成す光景にしか現われない。人間の存在を超えた、人間存在の創設における存在のあり方そのものなのである。

1-2 必然性と実在

「実在」は、自我の放棄によって、人間存在が「真空」になっていくところに現れる。「真空」において、「神」からの「恩寵」が人間存在を建て上げる。「真空」と「恩寵」が織り上げる極限状態にこそ「実在」は表現される。したがって、人間には二つのことが要求される。一つは「真空」を埋めようとする〈わたし〉の傾向に抵抗すること、もう一つは「恩寵」が人間を満たすがままにすることである。この二つに共通することは、人間の自発性、人間の主体性に対する抵抗であり、人間が自らの存在を独力で作り上げ、維持する自由への抵抗である。このことは人間の廃棄を提案するものではない。リサ・マクルーフは、シモーヌ・ヴェイユの思想に人間的なもの、人間にとって自然なものの否定を認めてはいない。しかし、マクルーフによると、ヴェイユ思想は、人間的なものや人間の自然的傾向がこれらを超えたものによって意味付けられることを要求する²⁴。超越的な光によって照らされなければ、世界に対する認識は「想像力」に支配されることになってしまう。そこで見えるものは「偽の実在」、または「半実在」である²⁵。〈わたし〉の権能によって世界から切り出された「実在」は必ず歪んでいるからだ。人間は、「想像力」という自身の自然的傾向に引き摺られたままでは、〈わたし〉から発する眼差しに照らし出された、偏り、歪んだ世界の外に出ることはできない。「想像力」という人間的な権能から人間自身が自由になることが必要なのである。ヴェイユ思想は人間性の否定を要請しているのではない。彼女が切望しているのは、「想像力」に抗して、世界を見ることなのである。

人間にとって、「想像力」に抵抗することは、死にも匹敵する困難である。では、人間はどのように「想像力」に対抗しうるのか。ヴェイユは、「真空を受け入れる」ことが必要だと考える。マクルーフによると、〈わたし〉を中心とする世界の認識こそが真理との接触を妨げる²⁶。そのため、真理へと到達するためには、〈わたし〉の死、つまり「実在」との接触が不可欠である²⁷。「実在」との接触は、誤謬も欺瞞も、議論も探求も終わらせる。人間は世界のなかで、真理を求めて、可能なあらゆることを企てるが、人間が「実在」に出会ってしまうと、突き付けられた問題は解消してしまうからだ²⁸。「実在」との接触は、充足のための〈わたし〉による企ての意義を否定することで、〈わたし〉の生の価値をも否定することなのだ。こうして見ると、「想像力」に抗して、真理へと到達するためには、〈わたし〉は死に、人間は「真空」にならなければならない。そして、「真空」であることを受け入れなければならない。

「真空を受け入れる」ことは、人間が自身のなかに次元の違いを持つことである。そして、「真空を受け入れる」ためには、「執着を脱すること」と「時間を廃棄すること」という二つのブ

ロセスを必要とする。第一に問題となる「執着を脱すること」は、〈わたし〉を満たす「この世」を廃棄することである。「執着を脱すること」は、〈わたし〉が自分の存在の重さを感じさせてくれるものにしがみつき、「真空」を悪しきものとして排除しようとする心から人間を救い出す。では、まず、執着するとはどのようなことなのか。シモーヌ・ヴェイユはこう答える。「執着することとは、實在性 *réalité*²⁹ の感覚における不十分さにほかならない。人が事物の所有に執着するのは、その事物の所有をやめるなら、そのものは存在することもやめると考えているからだ³⁰。「執着」の対象については、それが存在するか否かまでが、所有できるか否かに懸かっている。したがって、「執着」の対象は、それを欲する〈わたし〉の権能にのみ与えられているといえる。そこで、事物の「實在性」がすっかり忘れ去られている。だから、ヴェイユは「この世の想像上の王権を脱ぎ捨てること。絶対の孤独。その時、人はこの世の真実に触れる」³¹ことが重要だと考える。〈わたし〉の周囲にはこの世の事物や名誉が随伴し、〈わたし〉の存在を支えてくれる。もしくは、〈わたし〉の周りには、世界に唯一の基点としての〈わたし〉に服従する「この世」が広がっている。しかし、「この世」がもたらす諸事物や榮譽が自分を価値あるものにしてくれていると考えることを可能にしてくれるような諸事物、および、それらのあり方は、「實在するもの」には関係ない。それらを欲する人間による想像が産み出すものである。「執着」とは、〈わたし〉を満たしてくれる、〈わたし〉を支えてくれる世界を構築するための、〈わたし〉による〈わたし〉の至上権の行使なのである。

「執着」により人間が接近するものが「實在」と全く無関係でないことはシモーヌ・ヴェイユも認めるところである。「この世の實在 *réalité du monde* は、わたしたちの執着から、わたしたちによって作られたものだ。このような實在は、わたしたちによって諸事物のなかに持ち込まれた自我にとっての實在 *réalité du moi* である。それは少しも外的實在ではない。この外的實在は執着を脱することによってしか感じ取ることはできない」³²。人間は自らの周囲に配置された事物の存在に「實在」を映し見る。人間は、〈わたし〉の周囲にあり、目に映る諸事物の存在に、不完全で、歪んだ仕方「實在性」を認めるのである。「この世の實在」の歪みには、二つの原因がある。一つは、「この世の實在」が人間に内在的であることだ。ヴェイユは「物質的な利益を精神的な利益の条件として（例、飢え、疲れ、屈辱が知性を暗くし、思考への沈潜を妨げる）受け取り、感じるが、それにもかかわらず、それらを捨てる」³³と語る。つまり、一方で、この世で人間を満たすものは、それがなければ人間が生存できないような基礎的なものである。だから、「この世の實在」は〈わたし〉にとって手放せないものであり、これを手にすることは〈わたし〉の関心の中心にある。しかし、他方で、「この世の實在」を手にすることに忙殺されてしまうのは、「真空」と「恩寵」の二つの底によって人間存在を養う「神」を拒絶することである。「真空」が生じることを拒絶し、なおかつ人間が人間の力でそれを埋めて生きていくことができると考える傲慢である。「この世の實在」という歪んだ「實在」の出現のもう一つの原因は、人間が「實在」について不完全な理解しか持たないことである。「この世の實在」は〈わたし〉によって、〈わたし〉の周囲の諸事物に授与される。しかし、真の「實在」とは、人間の存在に先立って存在するものであった。人間は「實在」を諸事物の存在の確かさ、明白さとしてしか理解できない。正しく認識していないのだ。「執着」は、全てのものを〈わたし〉の周囲に集め、整列させる。一方で、存在しているものの「實在性」を

事物の〈わたし〉の生にとっての不可欠さに置き換えてしまうことによって。他方で、「実在」を、感覚された事物に〈わたし〉が授与できるものだと考えるという根本的な誤謬によって。その時、「実在」は人間に先立って、人間を超えて存在するものではなくなっている。

「執着を脱すること」とは、〈わたし〉の心を占め、失いたくないという思いで心を雁字搦めにする魅力的な事物や榮譽、世界観などの支配から脱出すること、人間心理から自由になることでなければならない。「執着」から自由になることは〈わたし〉のなかにあって自分を窮屈にするような何かを退けることではない。超越的な次元からもたらされるものに出会わなければならない。「恩寵ではないあらゆるものを捨てること、そして恩寵を欲さないこと」³⁴とシモーヌ・ヴェイユは忠告している。〈わたし〉から離脱するためには、〈わたし〉に対する都合の良し悪しに関わらず、「恩寵」ならざるものを廃棄する必要がある。しかも、特に〈わたし〉にとって、「恩寵」ではないものが幸福をもたらすことを自覚し、そのゆえに、「恩寵」以外のものを廃棄することである。彼女は語る。「わたしの欲望を、さまざまな幸福から遠ざけて、待つこと。経験はこの待つことが満たすことを知っている。その時、人は絶対的な善に触れる」³⁵。手近な利益に手を出さず、じっと「神」による充満を待つことが重要である。そして、「真空」を埋めてくれるように思われる見せかけの「善」にしがみついてはならない。目先のものに飛びつかず、じっと待った時に手に入るものは、時代や場所、置かれた環境に左右される〈わたし〉にとっての善とは比較にならない絶対的な善である。そして、「わたしたちが思い浮かべること、定義することもできないようなこの善は、わたしたちにとって真空であるから」、「待つこと」が重要になると彼女は考える。だから、人間の存在は一貫して「真空」である。「恩寵」が到来するときにも「真空」である。執着から逃れ、この世の支えを無くして「真空」であり、何が与えられるのか予測も想像もつかず、何かを求めている時も「真空」であり、その結果も「真空」である。つまり、「執着を脱すること」とは「神」に依らないあらゆる支えを喪失し、「神」による比類なき支えを受け取ることなのである。

このように考えると、現在「真空」がいかに悲惨な仕方ですべて〈わたし〉の存在を否定していたとしても、これに耐えて時期を待っていれば、未来のいつかの時間に「恩寵」がそれまでの辛さに報いてくれる。だから、「真空」も将来の素晴らしい「恩寵」のためならば、受け入れられる、ということのように見える。しかし、「恩寵」を数直線上に時系列に並べた時、「真空」の次に来るものだと考えるなら、「恩寵」はただの「報い」や「慰め」に過ぎないものとなる。「恩寵」を「真空」の後に来る慰めだと考えることは、「恩寵」を貶めることである。したがって、「神」に支えられた人間存在を取り戻すためには、「時間を廃棄すること」が必要になる。では、そもそも「時間」は何をするのか。ヴェイユは「真空を満たす未来。時には過去もまたこの役割を果たす（わたしは……だった、わたしは……した、など）」³⁶と考える。「時間」は「真空」を埋める。「時間」のなかで、人間は現在の状況から未来の状況を試算して、現在の状況の価値を算定したり、過去からの延長としての現在の価値を規定したりすることで、〈わたし〉の存在の価値を感じることができる。少なくとも、現在の位置を見失わなくて済む。この時、人間は「想像力」を用いている。「過去と未来は、想像力を盛り上げるために、限らない場を提供し、不幸の有益な働きを妨げる。だから、過去と未来を放棄することは、第一になすべき放棄なのだ」³⁷とシモーヌ・ヴェイユは述べる。この一節から二つのことが分かる。まず、「時

間」が「想像力」に果てしない活躍の機会を与えることが分かる。そこに「想像力」が働くということは、「時間」のなかでは「真空」の価値の否定があるのであろう。そして、次に分かることは、「想像力」という〈わたし〉の働きに対抗するためには、「不幸」が不可欠だということである。しかし、ヴェイユによると、「不幸」が「時間」との関係のなかで、その到来を妨げられる。「不幸」の性質を明らかにすることで、その効用を明らかにしなければならない。

第一の点について述べると、なぜ「時間」が人間のうちなる「真空」を満たし得るのかが見えてくる。ヴェイユは「現在は究極・目的性を受け入れない。未来もそうである。なぜなら、未来は、現在になっていくものに過ぎないからだ」³⁸と述べる。「時間」の経過は、何も目的を持っておらず、いかなる極致に至ることもない。そのため、人間は「時間」のなかで果てしなさを覚えることができる。彼女は「人が期待していて、そしてやって来た楽しみによって失望させられる時、絶望の原因は未来に期待していたことである。そして、一度未来がそこにあるなら、それは現在である」³⁹と説明している。「想像力」を用いると、人は未来が実現してしまえば、それが現在同様味気のないものになってしまうことが分かっている、その落胆こそを未来に期待する〈わたし〉の原動力と感じ、絶えず何か善きものの方へ向かっていくことが可能であるかのような感覚を抱くことになる。とりあえず凡庸な現在を抜け出し、未来のある時点にたどりつくことができれば、今より状況が良くなるであろうという思いが人間を支配し、人を未来へと駆り立てる。もしくは、今感じている苦痛は永遠ではないのだと思うことで未来に期待を抱くことができる。だから、人間は「時間」のなかにあって、安らぎを得ることができる。「時間」の経過が人間を癒してくれると人々が思っている状況に対して、「対象、報いは未来にある。未来を奪い取ること、真空、均衡の喪失」⁴⁰とヴェイユは述べる。〈わたし〉は未来に向かっていくことで自らを重要なものと感じることができる。つまり、「時間」は未来への「想像力」を用いて、「恩寵」をただの「報い」に変えてしまう。「時間」のなかで生きることが、未来の〈わたし〉と現在の〈わたし〉を天秤に掛けることを可能にすることで、〈わたし〉は自らの存在の重みを感じ、満足する。「恩寵」は本来の意味で満たすものではなく、〈わたし〉をそのつど満足させるものに過ぎなくなっている。「恩寵」を「恩寵」として受け入れるためには、「時間」を捨てなければならない。

では、「時間」を脱し、「恩寵」によって満たされるためには、何が必要であるか。第二の点に着目しなければならない。ヴェイユによると、「時間」のなかで生きることを退けるためには、「不幸」が必要である。そして、「不幸」は人間が〈わたし〉を廃棄し、「神」に従って歩むことのためにも、大きな役割を果たす。「苦痛や疲労が魂のなかで果てしなく続くのではないかという感情を生むに至る時、この果てしなさを受け入れ、愛しつつ、じっと見つめたら、人は永遠に至るほどに引き抜かれている」とヴェイユは言う。この世での欲望の満足の道が閉ざされた状態、この世での満足の追求が空しいと思ひ知らされた状態から脱出できないことの自覚が、人間を「時間」から引き離し、永遠という特殊な存在の仕方へと導く。しかし、現世とは異なる次元を目指すための「不幸」は、単に人間を落胆させたり、打ちのめしたりする出来事の体験だけを意味しない。どのような「不幸」が必要なのか。「全く執着から脱している状態に至るためには、不幸は不十分である。慰めのない不幸が必要だ。慰めがあってはならない。いかなる表象可能な慰めも。その時、言い尽せない慰めが降りてくる」⁴¹。「不幸」には、い

つかは抜け出せるであろうという希望や生活の他の部分に目を向けると苦痛を中断できるような避難所は存在しない。生活の全体が「不幸」に彩られ、「不幸」であるということ以外の存在の仕方を不可能にするような「不幸」が必要である。だから、降りかかってくるあらゆる苦痛な出来事や不都合な事実を迎え入れることである。「負い目を許すこと。未来に補償を求めることなく、過去を受け入れること。今時間を止めること。これは、死を受け入れることである。」〈わたし〉の存在の価値に疑問を抱かせるような出来事が降りかかってくるその瞬間に、「不幸」を自らの存在に浸透させることが必要である。未来や過去に対する想像や予測、追憶によって、「不幸」ではない〈わたし〉を確保したまま生きることの可能性を捨てる。確かに、「時間」は人間に無限の感覚を与える。しかし、「時間」が人間に感じさせる永遠は真の永遠ではない。「時間は永遠の映しである。しかし、それは永遠の代用品である」⁴²。「時間」のなかで、〈わたし〉は未来に期待する。ある場合には過去にすぎる。そして、何に向かっているのかも理解しないままに、「想像力」が与えるあたかも〈わたし〉を価値づけてくれそうな対象の間をうろつくことを人間に強いる。この時に感じられている果てしなさは、〈わたし〉の欲望が乗り換える対象の数に依存している。「時間」のなかで生きることによって得られる無限の感覚は、欲望の対象が区切りなく増え続けることしか意味しない。しかし、「不幸」は異なる。ヴェイユによると、「未来から気持ちを遠ざける、絶望の使い方は、ここにある」。⁴³「不幸」によって、〈わたし〉を満たすことのできる〈わたし〉の欲望の対象に向かうためのあらゆる道が閉ざされる。つまり、「不幸」は、今ここ以外のどこかに〈わたし〉が存在することを不可能にすることで、〈わたし〉を時間から剥ぎ取り、人間存在に永遠をもたらす。

「執着を脱すること」と「時間を廃棄すること」を通して、人間は「真空を受け入れること」ができる。では具体的に、「真空を受け入れる」とは人間が何をすることなのかを以上を踏まえて考えていきたい。まず第一に挙げることができるのは、〈わたし〉の能力を抑え込むことである。執着することは、〈わたし〉を満たすために、また既に満たされている〈わたし〉を守るためにさまざまな努力をすることである。「均衡」を求める努力、「報い」を求める努力、「慰め」を欲する心、これらを抑制しなければならない。ヴェイユは「自分自身のなかで、真空を満たそうとする想像力の働きを常に中断すること」⁴⁴が重要だと考えている。また、「報いを欲しががる気持ち、自分が費やしたのと等しい価値のものを受け取ることを欲する気持ち。しかし、こうした気持ちを無理矢理ねじ伏せて、真空をそのままにしておくと、風の誘いのようなものが生じ、超自然的な報いが不意に到来する」⁴⁵とヴェイユは語る。二つの引用において重要なことは、「均衡」を求める努力を抑え込み、「想像力」が働き始めないように注意することである。そして、もう一つ重要なことは、消極性である。ヴェイユによって奨励されているのは、「真空」を欲望することではない。また、「真空」を満たそうとする「想像力」や〈わたし〉を否定したり、攻撃したりすることでもない。「均衡」を求める心の働きを押し留めることは、〈わたし〉の存在の重さが軽くなっていく時、それを軽くなるがままにしておくことである。〈わたし〉の価値の低減を阻害することでも、故意に促進することでもない。彼女が要求しているのは不動であることである。「人間は、閃光のきらめく一瞬にしか、この世の法則から逃れられない。不動の瞬間、観想の瞬間、純粋な直感の瞬間、精神的に空虚であるような瞬間、心の真空を受け入れる瞬間」⁴⁶とヴェイユは言う。〈わたし〉の働きを抑えるには、〈わたし〉のな

かの「真空」をじっと見つめ、動かないことが必要なのである。

次に、「真空」を受け入れるために人間が取るべき行動は、欲望から対象を切り離すことである。ヴェイユによると、「その対象からエネルギーを引き離すために欲望の起源へと下っていくこと。そこでは、欲望はエネルギーとして本物である。偽物なのは対象である」⁴⁷。特定の対象の所有を目指す時、欲望を満たしてくれる対象の存在は夢想されたものである。しかし、その時にも満たされることを目指すエネルギーとしての、人間を衝き動かすプロセスとしての欲望が空想の産物であることはない。例えば、飢えている時、あれが食べたいと思ひ浮かべる食べ物は想像されたものに過ぎないが、だからといって、飢え、食べ物を欲していることまでが想像上のことであることはありえない。何を欲するかに関係なく、「欲していること」は真実であり続けるのだ。欲望を対象から解放することは、自己を「欲していること」そのものに従わせることである。この時、対象への思慕ではなく、「欲していること」そのものに従うとはどのように振る舞うことなのかを考えてみなければならない。何かを得ても、満たされない思いからすぐに別の対象へと向かっていくという過程全体を甘受できることなのか。また、目標そのものを心に抱かず、手当たり次第の探索に出ることなのか。どのような場合を考えるにせよ、「報い」に向かっていることが重要である。ヴェイユは「だから、福音書には「わたしはあなたに言う、彼らはその報いを受けてしまっている」とあるのだ。補償は必要ない。感受性を超えたところへ運んでいくのは、感受性における真空である」⁴⁸と述べる。人間には、欲望し始めた時、既に欲望というエネルギーが与えられている。ただし、エネルギーを用いる時に、何が何でも費やしたエネルギーに見合った何かを受け取ろうとすると、人間は欲望の対象に支配されることになる。したがって、欲望は費やされたエネルギーに見合ったリターンを受けることなく、浪費されなければならない。つまり、ヴェイユが「真空」を受け入れるために奨励している世界との対峙の仕方は、その行為に意味や意義、目的を求めず、欲望をエネルギーとしてただ使うことである。欲望を対象に帰着させず、限りなく使い果たすことで、欲望する〈わたし〉は想像上の対象に引きずられることから逃れている。

「真空」を受け入れるために人間が取るべき最終的な態度とは、この欲望を意味なく消費し尽くすことの究極的な意味を成就することである。具体的には、「神」を存在しないものとして、「神」に懇願することである。この最後の提案は、ヴェイユが示してきた3つの提案のなかで最も理論性を欠き、実践的である。ヴェイユは「純化の一方法。ただ単に、人に対して秘密のうちに祈るだけではなく、神は存在しないのだと考えながら祈ること」⁴⁹と言う。この言葉の持つスキャンダラスな響きに欺かれず、正しい意味を理解するためには、次の一節を読む必要がある。「しかし、神が守銭奴にとっての宝であるかのように、意味に満ちてしまった時、神は存在しないのだと強く自分に言い聞かせること。たとえ、神がいなくとも、神を愛していると痛感すること」⁵⁰。神は〈わたし〉が何らかのことを成し遂げるための手段であってはならない。〈わたし〉の所有の標的ではないという意味で、目指すべき目的であってもならない。そして、最後に求められることは、〈わたし〉の都合と釣り合う神は存在しないとしても「神」を乞い求めてしまっている状況があったら、自分が「神」を欲してしまっていることを自覚するということである。「神」への思慕の自覚に至ることが、実は掛け値なく「神」を迎え入れることだからである。ヴェイユは「人に懇願すること、これは自分固有の価値体系を他人の心

のなかに力づくでも入り込ませようという絶望的な試みである。反対に、神に懇願すること、これは自分の魂のなかに神の価値を入り込ませようという試みである⁵¹と語る。人に願う時には、〈わたし〉の言う通りのものを他人が与えてくれることを強く願う。「神」に祈る時には、自分の願いや思いを語るにしても、「神」にとっての必要が整えられていくことを認めて、語る。だから、「神」の前で「祈る」ということは、ご利益があるから神を認めたり、〈わたし〉を認めてくれるから神を認めたりするような仕方では「神」の前にあることではない。「神」を受け入れるのは、ただ「神」だからである。「神に祈る」時、「祈り」が聞かれることとは、〈わたし〉の思っていたことが成し遂げられることではない。そうではなく、一人の人間にとっても、「神」が創造した世界にとっても、言明し得ないほどに深いところで必要とされていることが達成されてしまうことである。その時、人間の「祈り」は独白、一人語りである。しかも、何に対して祈っているのかも、何のために祈っているのかも考えないほどに徹底した独白である。ヴェイユは述べる。「死んだオレステースについて嘆くエレクトラ。もし神は存在しないのだと考えながら神を愛するなら、神は自らの存在を顕す⁵²。この独白に対して、真実の「神」が姿を現すのだ。

ここから、「神」がどのような姿でこの世に現れるのかという問題について考える。この問題について考えることは、シモーヌ・ヴェイユの思想における世界のあり方、人間のあり方、そしてそれらを成立させしめる「神」の働きを一つの問題として統一することである。ヴェイユは、「神」がこの世に姿を現す時、人格的な存在として現れると考えている。つまり、「神」はイエス・キリストとして現れると考えているわけである。しかし、「神」が人格的に現れることは、イエス・キリストを単なる「神」の外面的な姿と捉えることを意味しているわけではない。彼女は「神」の具体性について言及しようとしているのである。彼女にとって、「神」とは無限性や絶対性、永遠なるもの、善、主権者などに付いた単なる名前ではない。「神」は人間と同じように感情を持ち、肉体を持ち、地上を歩み、生きて一瞬一瞬働く存在である。一人ひとりの間近に寄り添い、支える存在である。しかし、その反面、ヴェイユ思想においては、やはり「神」は高みに存在し、全てを超越し、全てを見通し、時間的にも空間的にも全てのもので支配する存在でなければならない。人間には理解の届かない、人間に所有されない高さを維持していなければならない。ヴェイユはキリスト教の「神」は超越であり、具象であると考えている。そして、イエス・キリストこそが、二つのあり方を矛盾なく併せ持つ「神」である。したがって、シモーヌ・ヴェイユの思想においては、イエス・キリストはキリスト教の「神」の一つ姿であるだけでなく、「神」そのものの姿であり、人間が模範とするべき存在である。

では、イエス・キリストという「神」の顕現は具体的にはどのようなものなのか。「脱創造」⁵³という現れ方である。ヴェイユによると、この語が意味しているのは「創造を離脱すること」である。しかし、これだけでは難解なので、シモーヌ・ヴェイユの思想の広範囲を当たって、「脱創造」の考え方を明確にしていく必要がある。まず、一般的な説明が必要である。「脱創造」はなぜ必要なのであろうか。ヴェイユは「脱創造。創られずにいるものへと創られたものに移していくこと」と述べる。「神」は全てを創造したが、「神」は誰にも創られていない。創造されることを免れている唯一のものが「神」である。したがって、「脱創造」とは、あらゆる被造物が「神」へ帰っていくこと、「神」のあり方に即したあり方へと復帰することだと考えら

れる。ここで「脱創造」の前に、「創造」とは何であるかを考えなければならない。ヴェイユの言葉では、「神」による「創造」とは、あらゆるものが存在するようにするために、「神」が自らを「捨て去ること」である。「捨て去ること。創造における神の放棄に倣うこと。神は——ある意味で——全てであることを放棄する」⁵⁴。「創造」とは、「神」が自ら「神」という立場をそのつと打ち捨てることである。世界を創造することは、有限で可変的な創られたものの世界という、一面的には「神」のあり方と相反するあり方をするものに存在を許すことである。世界を創造することは、「神」が「神」であることを放棄することなのだ。したがって、ヴェイユにとって、人間の存在は「神」が自らそのあり方を捨てたことによって成立しているものだということができる。「創造を脱すること」は「神」が「神」ではないものになる行為として「創造」されたものではなくることである。その時、人間は「神」から離れようとする力すら持っている。ヴェイユは、「〈神から逃れる〉一つの力が存在する。でなければ、全てが神になってしまうだろう」⁵⁵と言う。人間は「神」の力に依らず、自分の力に従って、自分の都合を軸に世界を作り出す力を持っている。「神」の影響を受けないことによって、〈わたし〉自身であることが可能なのである。

「創造」という神の働きを脱するために、何を成すべきか、その具体的行為を見ていきたい。既に述べたように、人間にとって自我、つまり〈わたし〉を主張しうる何かが存在しているということは、「神」から何かを奪うことである。本来「神」のものである全世界を、人間の自我の主観的権能の範囲内に留めようとすることである。前の段落でみたように、「神」は人間が「神」を差し置いて存在しうることが可能であるような力を人間に与えている。つまり、〈わたし〉であることは、「神」がその場を被造物に譲る「創造」の行為であるわけである。だから、「脱創造」としての「消えること」は〈わたし〉との対決である。ヴェイユによると、「かれは、自らの神性を脱ぎ捨て、空しくなった。わたしたちも、それを伴って生まれてきた偽の神性を脱ぎ捨て、空しくならなければならない」⁵⁶。「偽の神性」とは、〈わたし〉の働きによって世界を支配する力を人間が持ちうることである。〈わたし〉を支配者の位置に置く立場を離れることは、「神」自身が初めにしたことだとヴェイユは考える。「[かれは神のかたちで現れたが、それを空しうして……]。この世から空しくなること。しもべの本性を纏いなおすこと。時間のなかで、そして空間のなかである一点にまで小さくなること。無へと」⁵⁷。「神」は、イエス・キリストとして、仕えられる者でありながら、仕える者として、時間の上でも、空間の上でも無限でありながら、ある一時代、ある一点にしか存在できないものとして、全てでありながら、何でもないものとして現れた。ヴェイユは、真の「神」が自身の立場を捨てたのであるから、「神」に忠実であろうとする人間もまた、「神」を真似て〈わたし〉を放棄することが必要だと考えた。しかし、「神」を真似て〈わたし〉を放棄することは、「神」の前でわがままを制御したり、偉ぶらないように気をつけたりすることだけを意味しているわけではない。「神」がとても「神」に見えないものとして現れたように、「神」の前にいるということが信じられなくなるほどに価値の低いものとなることである。ヴェイユは「神のようであることができるとしても、神に服従する泥である方がよかろう」⁵⁸と言う。「神」の前で〈わたし〉は何ものでもない。存在しない方が良い。ただ「泥」のように「低い」ものとして、「神」にかしづくという点だけで人間は「神」に触れている。〈わたし〉は「神」の前で謙っていること以外の権利を持たない。

世界を所有したり、世界を好きに動かしたりする権利は持たない。ヴェイユは「わたしはフィアンセを待つ若い娘ではない。そうではなく、二人の傍に居座る迷惑な第三者である。彼らが二人きりでいられるように、立ち退かなければならない」⁵⁹と語る。「消えること」とは、「神」と世界の間に割り込むことをやめることである。つまり、「神」を差し置き、自分固有の視点から世界を独占したいと切に願うエゴイスティックな〈わたし〉として存在することをやめることである。「神」が〈わたし〉に場所を譲って「創造」した〈わたし〉であることをやめるべきだ。「創造を脱すること」とは、被造物の〈わたし〉であることをやめることなのだ。「創造を脱すること」とは、人間が、「神」が自らの性質を脱ぎ捨てて世界を創造した結果である被造物として生きることを意味しているのではなく、「神」が神性を脱ぎ捨てて世界を創造したことの意味を実現しようとするを通して、「神」自身のもとへと近づくことなのだ。

では、なぜ「神」は自分の立場を捨てなければならなかったのか。わざわざイエス・キリストとなって来なければならなかったのか。「神」が全知全能ならば、なぜ悪が存在するのか。なぜ、悪に傾く可能性のある自由意志を人間に備えたのか。始めから罪など犯さないように創ればよかったのではないか。シモーヌ・ヴェイユの視点から見ると、全ての問いは的外れである。まず問うべきことは、なぜ「神」は宇宙を「創造」したのかということであるはずだ。既に述べたように、ヴェイユによると、有限で、移りゆく宇宙は存在していること自体が、無限で不変である「神」のあり方に反し得る。ヴェイユに言わせれば、「神」が自らに反するものの存在を認めない狭量さの持ち主であったならば、悪や人間の自由意志どころか、全宇宙は存在のしようがなかったのである。したがって、ヴェイユは「創造は愛の行いであり、永遠に続く」⁶⁰と言う。つまり、「神」は全知全能であると同時に、「愛」のある存在なのである。「神」は、あらゆる自分にとって不都合なことが起こりうる性質ですら、「愛」の故にその存在を認めたのである。

このような説明は問題を解決しているであろうか。何も解決していない。シモーヌ・ヴェイユ自身、問題が解決しているとは思っていない。ヴェイユは、実は「神」が宇宙を創った理由など存在しない、イエス・キリストとなって現れた理由など存在しないと考えている。より正確には、理由は存在するべきではないと考えている。ここで、シモーヌ・ヴェイユが「創造を脱すること」のために奨励する行動のうち、もう一つが明らかとなる。「必然」を眼前に置き、「服従」することである。シモーヌ・ヴェイユは「必然に服従することを受け入れること。そして必然を乗りこなしながらしか、行動しないこと」⁶¹と言う。「必然」であることと絡み合いながら、行動しなければならない。「必然」と絡み合いながら行動する人は魂がどのような状態であるか。ヴェイユは「そのことが可能だという事実のみから、あることが必然である場合がいくらかある」⁶²と答える。自分にできること、それが直接自分がしないではいけないことであるという状況がありうる。心にそれをせずにはいられないこととして迫ってくることを、自分のすべきこととして受け入れること。全ての行為が迫られていなければならない。どうしてもそうせずにはいられないと心に迫られているなら、一人の人間の行為は、何か一人の人間を超越したものに繋がっている。ただ、せずにはいられないこととして心に迫ってくるのが本物であるかどうかには注意する必要がある。ヴェイユは本物を見極めるためには、「意志と注意力の役割」をしっかりと把握しておく必要があると考える。「注意力」について、ヴェ

イユは「このように、それが一見そこでははっきりと現れないとしても、可能なことが必然性を含む場合には、しっかり見極めなければならない。このような場合に動き、他の場合には動いてはいけない」⁶³と述べる。つまり、「注意力」は、事柄や対象にしっかりと目を向けることで、意志が行動に突っ走ることを押し止める働きをする。そして、ヴェイユは同じ「注意力」について、「有徳なことをする時、しないではいられないこと、しないことができないことだけをするように。しかし、正しく導かれた注意力によって、絶えずしないではいられないことの数を増やすように」⁶⁴と言う。「注意力」はそれを事象や物質に向けることで、「必然」であるようなことを一つ一つと暴いていく。このように考えると、「注意力」というのは、完全に人間の機能である。人間が自分の認識能力を対象に集中させ、じっと分析するなら、「必然」であるものが次々を見せてきて、その先には「神」が見出される。ある面で正しい考え方だ。しかし、ヴェイユによると、「注意力」には、さらに本質的な性質がある。「おそらく、一方は内なる悲惨さの否認（これも虚偽）が伴う。他方は、常に自分の状態と自分の愛するものの間にある隔たりに向けられた注意を伴う」⁶⁵。対比されているのは、望みと真逆の結果を生む努力と結果は芳しくないが、豊かな教えを生み出すような努力である。「注意」は自分が欲し、向かっていくものに手を触れないという本質的な働きを有する。それどころかヴェイユによると、「注意」は自分と対象の間の隔絶を際立たせる。自分と対象の間にある無限の隔絶が横たわっていると、「注意力」を働かせる人間は、その人の今ここにある生成の姿に出会う。その姿は、欲しても願いが聞き届けられない人間の「悲惨さ」そのものである。逆から問題を見ると、「注意力」を通して見た時、対象は〈わたし〉の主観性から切り離され、そこには〈わたし〉の都合や〈わたし〉の欲望が一切混入していない。したがって、「注意力」を通して見た対象は、事物そのものである。「必然。人が自分のうちに持つ目標も含めて、諸事物間の関係、自分自身をこの間柄の一つとして見ること。行動はそこから自然に結果する」⁶⁶とヴェイユは考える。つまり、「注意力」は〈わたし〉を世界の諸事物の連鎖のなかの「必然」の一部にする。この時、人間の行動は「必然」に押し流されたものとして分泌される。「注意力」によって、「意志」を抑えることで、人間は「必然」であるところのもの、つまりそれをしないではいられないようなことに導かれるのである。

「神」は、人間が「注意力」を最大限に活用し、「意志」が発作的に行動に移されることを防ぐところに現れる。重要なことは〈わたし〉を用いないことである。〈わたし〉が「想像力」を駆使して、〈わたし〉の要望や願いを「神のみ心」だと取り違えることがあってはならないからだ。両者を取り違えることは、ただの取り違えではなく、「神」を「神」と認めないことだ。「自身のなかに沈黙を生み出し、あらゆる欲望と意見を黙らせ、愛を込め、魂の全てを捧げ、言葉にせず、「御心が行われますように」と思う時、その後不確かなところなくしなければならぬと感じられること（あるいは、ある点でこれも間違いかもしれないが）が神の御心だ」⁶⁷。〈わたし〉を極限まで切り詰め、〈わたし〉の働きが全く感じることでできない状況でも、何か心が迫るものとして人間を急かたてているなら、急かたてている何かは、もはや〈わたし〉のなかには存在していない。ヴェイユは「行動の動機を自己の外に移すこと。迫られること。完全に純粋な動機（または低劣な動機、いずれにせよ同じ法則だ）は外的なものであると思われる」⁶⁸と言う。〈わたし〉を外から揺り動かし、〈わたし〉の都合を超えて人間を押し流してい

くエネルギーの源は〈わたし〉の外部にある。無論、だからと言って「神」が人間の心に迫っているのかは人間には分からない。〈わたし〉の能力によって、欲望の対象へ向かうためのエネルギーを好き放題に集めることができない領域で起きていることだから当然である。しかし、少なくとも、〈わたし〉の外側から〈わたし〉を急きたてるものは、〈わたし〉の都合に縛られない、〈わたし〉を脱色した「純粋な動機」となることができる。世界の創造に始まる、仕える者の姿に身を窶した「神」の超自然的な働きは、ここにも表れている。ヴェイユは、「しかし、それは決して上昇ではなく、下降の運動であり、わたしたちではなく、神の運動である」⁶⁹と述べる。「純粋な動機」は、「神」が人間の心に避けがたいものとして迫ることで与えられるものである。行動の「動機」を〈わたし〉の必要ではなく、逆らい難い心への迫りとするのは、「神」の行動であり、人間が〈わたし〉の都合や要望に従って理解できることとは根本的に異なる次元に備えられている。このことは、「必然性」を通じての「神」の意志の実現なのである。人間は「神」の備えた計画のまゝに身を晒すことしかできない。ヴェイユは「神が何かあることを命じていると知ることはできない。もし神を限りなく自分の上の方に位置づけるなら、何をするにしても、神への服従を目指す気持ちが人を救う。しかし、もし自身の心を神と呼ぶなら、何をするにしてもその気持ちは人を滅ぼす」⁷⁰と言う。人が「神」を自分の果てしなく上の方に仰ぎ見ることが、「神」と人間の間に置かれた唯一の正しい関係である。心に押し迫ってくる全てのことを、〈わたし〉よりも高次の次元から「神」が人間の心に迫っているのだという観点から見るという関係こそが「神」と人との正しい関係である。「神」は上に仰ぎ見なければならぬ。たとえ、「神」が決して上にあるようには見えないような姿を取っていたとしても、「神」を自分より上位のものとしなければならない。「かれらは、飢えていた人に食べさせ、裸の人に着せないことができないような状況にあったのだ。かれらは、これらの行為をキリストのためにしたのでは全くなく、キリストの憐みが心のうちにあったので、そうしないことができなかったのだ」⁷¹。この一節は二つのことを知らせてくれる。一つは「愛」の範型は「神」にあることだ。とても助ける値打ちのある人物には見えなかった目の前の男を人々は助けた。助けないことができない程に彼らの心に何かが迫っていたからだ。「神」は決して上方に仰ぎ見ることができないような姿で地上に現れた。「愛」という繋がり模範となるためである。純粋な「憐み」⁷²は「神」であるイエス・キリストのもとにある。人が人に対して「憐み」の感情を持つ時には、純粋なままにキリスト・イエスのもとにある「憐み」を自分の心の持ち様としなければならない。もう一つは、人々がイエス・キリストを助けられないことができないほどに心に迫られていたのと同様に、「神の愛」もまたこの世に注がないことができないほどに迫られたものであったことだ。「神」は人間を憐れまないことができなかった。罪を犯してしまっても、人間に「愛」を注がないわけにはいかなかった。罪を犯す可能性のあるあらゆる「被造物」を「創造」する「愛」、キリスト・イエスとして地上に現れ、人類の罪を贖うために地上を歩むという「愛」、人類の罪の贖いのために十字架に架かり、壮絶な苦しみの末に死ぬ「愛」は、「神」が「神」であるが故にこの世に注がないわけにはいかなかった「愛」である。この世を愛しておいたら、後で人間がお返しをくれるから愛するのではない。「神」は滅ぼしても滅ぼし足りない存在を愛したのである。

「創造」や「受難」に理由などあってはならない。「神」が「愛」に従って、世界を「創造」し、

イエス・キリストとして誕生し、十字架に架かったという時、「愛」は何かが成されたからこの世に注がれたわけでも、何かをしてもらうためにこの世に注がれたわけでもない。「神の愛」、そして「神の愛」に倣おうとする人間の「愛」は、「超自然的な愛」でなければならないとシモーヌ・ヴェイユは考えている。「想像することなく愛そうとすること。裸のままの外観を、いかなる解釈も加えず愛すること。そのとき愛されているのは真に神である」⁷³。目の前に現れた対象のありのままの姿を愛さなければならない。自身の欲望を満たしてくれる何かだから愛するのでも、自身の理解の範囲内に収まるものだけを愛するのであってもならない。自分に都合が悪い事実であろうと、自分の理解を超えた出来事であろうと「愛」を持って、対象を抱きしめなければならない。自分の欲望の満足や自分の都合にぴったりと当てはまる対象を求める〈わたし〉の働きを遮断して「愛すること」が必要である。「愛」は〈わたし〉の働きを断ち切ってこそ、「超自然的な」ものであることができる。ヴェイユによると、「自分自身のなかに真空を受け入れること、このことが超自然的である」⁷⁴。また、ヴェイユは「人が自由にできる能力の全てを用いないこと、それは真空を持ち堪えることだ。このことはあらゆる自然法則に反することであり、恩寵にだけ可能である」⁷⁵と云う。〈わたし〉が欲望の対象を満たそうとしないこと、〈わたし〉が「想像力」によって自分の周りに快適な世界を展開しないようにすることは不自然なことである。しかし、〈わたし〉の原理に従わず、〈わたし〉を超えたところにあるものを信じて、〈わたし〉の操縦を超越的なものに委ね、〈わたし〉から見ると不自然なことを受け入れるならば、「超自然的な」何かに人間は触れる。「神」の「愛」は〈わたし〉の自然を超えたものであり、〈わたし〉の思いもしないところから無条件に到来する。「創造」も、「受難」も、「神」の「超自然的な愛」によるのである。

この世の原理の外にあるものは、〈わたし〉を欠いている。〈わたし〉が自分のしたことと釣り合う対価を求めたり、〈わたし〉の存在の価値に見合う対価を求めたりすることを排除しなければ、この世の原理の外に行くことはできない。〈わたし〉はこの世の富や名誉、欲望を満たしてくれるもの、ただ生存の役にしか立たないものなどを得ることで満たされたり、世の物を追うことで心も頭も一杯になったりして、この世の原理から抜け出すことができないからだ。〈わたし〉の利益や都合を抜け出さなければならない。〈わたし〉から抜け出すためには、「時間」と「執着」から脱出しなければならない。「時間」は人間を〈わたし〉にはまり込ませる。〈わたし〉の今の苦境も時間が解決してくれるかもしれない。〈わたし〉の幸福は時間が経てばもっと豊かになるかも知れない。〈わたし〉の計算や期待を混ぜ込んで、この世の原理のなかに住み続けることができる。「時間」のなかに生きることはこの世の外に出ないことだからである。「執着」を乗り越えるため、ヴェイユは「真空」であると同時に「恩寵」に満たされていることが必要であると考えている。ヴェイユが述べる「恩寵」は、どこまでも「真空」になっていく人間存在に寄り添い、底をあてがうように人間存在を支えている。もちろん、人間存在がすでに「真空」であることが求められるという条件のもとでだが。ヴェイユの「恩寵」は、弱く、無へと向かっていく者をも無へと向かっていくままに支えている。「恩寵」は「真空」に向かっていく。見返りを一切期待することのできない「真空」に向かっていく。人間は「恩寵」を受け入れるしかない。この見返りが期待できなくとも心に拒否し難く迫ってくることを受け入れてこそ、出会うことのできるものが「神」である。「神」が、見返りがなくとも地上に注ぐ「恩

寵」は「神」の「愛」に基づく。「神」に反しうる存在を「創造」し、自らを放棄して、人類の罪を贖うために、有限なものとなって地上に下り、死にまで従う「愛」は「恩寵」である。人間が人間であるためには、「恩寵」を受け入れなければならない。

このセクションでは、「真空」と「恩寵」が織り成す人間存在の成立の時から出発して、「神」による世界の「創造」へと議論を展開してきた。ここには、一貫して「神」の「創造」以来の世界の「必然性」を見て取ることができる。「必然性」は、人間存在をそうでないことができない存在へと押しやり、〈わたし〉の能力と権利を抑制する。その時、世界は「実在」によって支えられている。「真空」であることを受け入れ、「真空」を「恩寵」だけが満たすことを期待し続けるところでは、すべてのものは〈わたし〉によって歪められることなく認識される。それは、「実在」の顕現の瞬間なのである。〈わたし〉の「想像力」によって、〈わたし〉を満たす諸対象への「執着」の生じるところでは、全てのものが歪んでしまう。「必然性」に従うことで〈わたし〉を切り詰めたところに、「神」からの一方的な「愛」に基づく「恩寵」が与えられ、「神」が自由な意志により「創造」した「実在」の世界が開かれる。この意味での「実在」は、人間に先立って存在し、人間を包み、支え、人間存在に意味をあたえるような「実在」である。

本節の最後に、シモーヌ・ヴェイユの思想における「実在」の位置を整理しておかなければならない。まず、人間存在の成立において、重要な役割を示す。ヴェイユによると、「想像力」は〈わたし〉を基準にして、〈わたし〉と同じ水準に属する世界から、〈わたし〉を養い、支えてくれるものを摂取する能力であるということが出来る。〈わたし〉の周囲に展開され、「想像力」を通じて消費される世界は、〈わたし〉によって改変された世界であり、〈わたし〉によって左右される世界である。しかし、「実在」は、〈わたし〉による価値体系の創設に回収されないので、〈わたし〉と〈わたし〉を満たすものの関係が成立する次元とは異なる次元に人間存在を運ぶことができる。〈わたし〉を超えた人間存在の基礎が「実在」なのである。この時、人間存在は「実在」によって満たされはしない。しかし、「実在」は人間存在を支える。「実在」は「真空」と「恩寵」が織り成す人間存在の極限の状態において現われるのだ。次に、「実在」は「必然性」との関係において暗示される。世界の存在との関係において暗示されると言い換えることもできる。「必性」もまた、〈わたし〉の権能を抑止するものである。「必然性」は〈わたし〉に関係なく、そうであること以外がありえないことを実現する。このことは「神」の本質である。「必然性」は、〈わたし〉が「神」によって創造された被造物として、「神」から離れたものとなり、「神」から世界のある一点を奪い取ることを防ぎ、創造によって、自らと異なる世界を創造し、この世界を養う「神」の意図、「神」自身と異なるあり方をしていながら、「神」が存在させないことができなかった世界を存在させ、支え続ける「神」の「愛」の実現である。このことは「実在」が世界の存在を成立させていることを示す。確かに、「必然性」の実現を通じて、「神」は人間に存在の仕方押しつける。「神」の意図した存在を実現する。その時、人間は〈わたし〉を超えた「実在」に接触している。この意味での「実在」は、世界の存在の根拠を指し示すのである。こうして、「実在」の概念が現れる思想上のポジションを整理してみると、「実在」は、シモーヌ・ヴェイユの思想において、人間存在の成立の基盤、存在の成立の基盤であるといえる。では、「実在」がどのようなものであり、どのように問題

化されているのであろうか。

2. 「実在」の性質と人間のアプローチ

「実在」は人間存在の成立の条件をなし、「神」の「創造」による世界の存在を示すことがなかった。では、この「実在」とは、どのようなもので、人間は「実在」にどのように接近しうるのであろうか。本節の問題はここにある。「実在」は、確かに「想像力」の前に立ちはだかり、〈わたし〉の水準から人間を救い出す。そして、この時、人間は、世界の存在を許し、認める「神」の「愛」の有無を言わさぬ「必然性」を受け入れることで、〈わたし〉に振り回されない「実在」に触れることになる。しかし、これらのことは、「実在」のいかなる性質に基づくのか。また、人間の「実在」に対するどのような関わりに基づくのであろうか。

シモーヌ・ヴェイユは、何らかの「執着」は、人間の価値に対する意識に基づくと告白する。「人は、あるものが良いと信じるから、それの方へと向かっていき、あるものが必要だから、それに繋がれたままになる」⁷⁶。この一文は、二つのことを示す。まず、人間は、自ら近づいていくものには価値を認めている。「良い」と判定するものに近づいていくのだ。そして、自らそれを所有し、所有し続けようとするものには、より強い価値を認める。「必要だ」と判定するものに固執するのだ。このような、対象への固執を産み出す価値体系について、ヴェイユは「この世の事物に関する見せかけは、諸物の存在ではなく、価値に関わる」⁷⁷と言う。諸物の価値、諸物への価値付けは、対象を見せかけのものにする。価値は諸物がありのままの姿を開示することを妨げるのだ。人間が欲するものは、「わたしたちは善の模造品の影しか所有していない」⁷⁸と言われるように、本来の善のコピーのコピーに過ぎない。それにもかかわらず、人間が諸物を欲するのは、諸物をありのままの姿以上に見せたり、以下に見せたりするからである。「善との関係においては、わたしたちは囚われ、鎖につながれている（執着）」⁷⁹。〈わたし〉にとっての意味を軸として設定された価値に閉じ込められ、対象そのものが見えなくなっていること、「執着」は対象そのものを忘れて、〈わたし〉による色眼鏡を通じて見られたものに固執することに存するのだ。

「執着」のこのような現状が、「実在」のある性質を逆説的に示す。既に示されていることだが、「実在」は、「執着」の対象とは反対に、〈わたし〉に左右されないものである。ヴェイユは、「現在」以外の時間は存在しないにもかかわらず、人間が過去や未来に拘束されている不思議について、「受動的に耐えられた時間——身体の苦痛、待つこと、後悔、良心の呵責、恐怖——にせよ、操作された時間——命令、方法、必然——にせよ、いずれにせよ、わたしたちがそれに従属するものは存在しない。しかし、わたしたちの従属は存在する」⁸⁰と語る。昔のある時点から現在まで持続している時間、この先のある時点で待ち構えている何かに向けて持続していく時間は存在しない。しかし、人間はこれらに縛られることを経験する。彼女は、「わたしたちは、現に実在しない鎖に繋がれている。実在しない時間は、全てのものごとわたしたち自身を非実在性で覆う」⁸¹と述べている。過去や未来に捕まることで、人間は実在できなくなる。かつての出来事やこれから起こりうる出来事の意義への自己の傾斜が人間存在の全体を占

扱すると、人間は時間に繋がれる。このように、経験がある種の価値付けによって序列化された人間においては、「実在」を見出しえない。主観と傾向性に支配された経験には、「実在性」が含まれていないからである。シモーヌ・ヴェイユは決定的な宣告をする。「価値判断から見ると、感覚は実在しない。価値という点では、わたしたちにとって、すべてのものは実在しないのだ。しかし、ある対象に偽りの価値を割当てても、この対象の知覚から実在性を奪うことになる。というのは、偽りの価値は知覚を想像に溺れさせるからだ」⁸²。価値賦与が行われる時、感覚は正常に機能しない。〈わたし〉が設定した価値の坂道の高低差に応じて、感覚が歪められるからだ。このような価値の斜面においては、すべてのものが、その物そのものではなく、〈わたし〉にとっての意味の代替物になってしまう。このことは、ともかく対象に何らかの価値を認めれば回避できるようなことではない。価値に関わる場所では、すべてのものが〈わたし〉に左右され、人間の目に移る、見せかけに覆われてしまう。つまり、反対方向から見ると、「実在」は〈わたし〉の対象に対する価値付けに関係なく存在するものであり、〈わたし〉に提示されたものとして作り上げられる見せかけの向こう側にあるのだ。

ここで一つの疑問が浮かぶ。「実在」が〈わたし〉の権能の前では見せかけに覆いかくされてしまうとするなら、「実在」はそれほど弱々しいものなのかということである。この問いは、「実在」と見せかけの関係に関する問いでもある。結論を先取りする形で述べるなら、「実在」と見せかけの間には、互いに排他的な、対決関係があるのではないのだ。この関係を検証する上で、二つの「実在」の性質に着目しなければならない。

事物の「実在」の知覚について、シモーヌ・ヴェイユは、「知覚における実在的なものであり、知覚と夢を区別するものは、感覚ではない。感覚に包まれた必然性である」⁸³と述べる。夢想と異なり、知覚に与えられる「実在」は、ある物はそのようにしかなりようがないという感覚を与える。その理由は、第一に、夢想は認識の主体に左右されるのに対して、「実在」は主体の状況や能力に左右されないからだ。しかし、より重要な理由は、「実在」そのものが直観性を有するからだ。この直観性こそ、「実在」の第二の重要な性質である。ヴェイユは、『「なぜそのようであり、他のようでないのか」』⁸⁴という問いを引用する。この問いは、なぜ目の前の事物がそのようであるかを尋ねているのではない。なぜ事物がそのようである以外にないかを尋ねているのである。この問いが明らかにしているのは、「実在」の「必然性」である。「実在」は、それを映し出す人間の認識に関係なく、それ以外のあり方で存在できないような仕方存在している。さらに議論を推し進めると、「実在」の直観性が見えてくる。彼女はこの問いへの回答として、『「それはそのようだ」』⁸⁵という言葉を用いる。この一言は、事物の存在の明晰さを前にしての諦めを意味しているのではない。「実在」は人間に直接的に、強烈に働きかけるということを示している。「実在」に触れる時、人間は事物の存在を直接に把握している。「実在」の知覚には、そうだからそうなのだというそれ以上遡りようのない根本的な知が直接的に与えられるのだ。その意味では、「実在」は眼に映った通りに存在している。「実在」は人間によって捉えられ、把握された通りのもの以上のものでも、以下のものでもない。「実在」に接触する時、人間は本質そのものをそのまま把握しているのである。

しかし、このことは、「実在」が表層的なものであるということの意味しているのではない。「実在」とは、実は目に直接見える見かけ上の姿に過ぎないと主張したいわけではない。ここで、

「実在」の第三の特性に触れねばならない。「高次の状態を低次の状態から区別するのは、高次の状態には、重ね合わせられた幾つもの平面の共存がある」⁸⁶とシモーヌ・ヴェイユは言う。「実在」は幾つもの平面を含んでいる。「実在」においては、表面から深層へと深まっていく諸「次元」が層をなしている。人間は、「実在」のうちであり、「実在」を前にして生きる時、これらの層状の諸「次元」を通過しなければならない。したがって、「実在するもの le réel」⁸⁷の基準、それは、それが固く、ざらついているということだ。人は、そこに喜びは見出すが、快適さは見出さない。快適なものは夢である」⁸⁸。「実在」のなかをスムーズに通り返けることはできない。「実在」に含まれる諸「次元」を通り抜けながら、一つ一つの「次元」における世界の存在の構造を体感し、解明しながらでなければ、人間は「実在」のなかを通ることはできない。見せかけは見せかけに相応しい層に、真理は真理に相応しい層に置く。そうでなければ、人間は「実在」について何も理解し、把握しえず、「実在」を通過して生きることもできないのだ。

ヴェイユの思想において、見せかけは、嘘、虚偽の類を意味するものではない。「感じられる諸物は、感じられる諸物である限りでは、実在するが、善としては実在しない」⁸⁹、さらに「外観は実在性に満ちているが、それは外観としてである。外観以外のものとしては、外観は虚偽である」⁹⁰。見せかけはそのものとして受取られなければならない、見せかけである限りの見せかけとして、ありのままの姿で見られなければならない。問題なのは、見せかけを表面より奥の深部の何かであると思ひ込むことなのである。シモーヌ・ヴェイユは、相応しい次元に相応しい対象を配置できないことの危険を警告する。彼女は「置き換え。低次の傾向（例、他人に勝ちたいという欲望など）を保ち続けながら、それに高次の対象を与えたので、自分が高められたと信じること」⁹¹の欺瞞を指摘し、「反対に、低次の対象に高次の傾向を結びつけるならば、人は高められるであろう」⁹²と言う。また、「無限を置く水準に注意すること。もし、有限のものだけが相応しい水準に無限を置くなら、どんな名で呼ぼうと、それがどのような名で呼ばれるかはどうでもよくなってしまふ」⁹³。そして、「わたしたち自身の低次の部分も神を愛さなければならない。しかし、愛しすぎではならない。そうすれば、神ではなくなってしまうだろう」⁹⁴。低次の傾向と高次の対象、有限と無限、人間の低次の部分と「神」。シモーヌ・ヴェイユは、あらゆるレベルで、相応しくない次元に相応しくないものを置くことに警告を発している。しかし、彼女は、高次の次元について沈黙することを要求しているわけではない。「十字架のヨハネにおける神への畏れ。自分には、相応しくないにもかかわらず、神について思考しているという畏れではないだろうか。神のことを正しく考えられないで、神を汚しているという畏れではないだろうか。この畏れがあるからこそ、わたしたちの中の低次の部分は神から遠ざかるのである」⁹⁵。十字架のヨハネは、神を思考し、神を語るに相応しくない者と自覚しながら、神について思考し、神について語った。しかし、神の前に価値の無い者として語った。高次の次元に対する人間のアプローチは、相応しい次元に相応しい対象を置くことに始まらなければならない。「実在」に関してもそうである。見せかけの外観そのものは、「実在」ではない。しかし、この見せかけの外見を、見せかけに過ぎないものとして捉え、解明し、理解することを通じて、「実在」の層に踏み込んでいくことはできる。ある次元に属するものをその次元にあるに相応しいものとして解明し、理解すること、このことが「実在」の解明への近道なのである。

「實在」には、〈わたし〉に対する超越性、直観性、重層性という三つの特質がある。この三つの性質の故に、人間は「實在」を導きの糸として「神」と交わり、生きることができる。人間は、「實在」のこれら三つの性質の故に、「實在」に含まれる多くの次元を一つ一つ解明し、理解するという方法で「實在」に接近していくことが可能になるのである。シモーヌ・ヴェイユは、「想像することなく愛そうとすること。裸の外観を解釈なしで愛すること。その時愛されるものが神である」⁹⁶と述べる。一つ一つの次元に属するものを属する次元に相応しいものとして知することは、〈わたし〉に基づく価値の坂道を用いることなく、諸物を理解することである。いかなる価値の賦与も、解釈も加えることなく、つまり、〈わたし〉を介することなく、諸物を理解することが「實在」の理解の本質である。そのとき、〈わたし〉に依らない世界の理解がなされ、〈わたし〉の権能を超えて人間存在のあり方を決定し、人間を衝き動かす「神」という存在に出会うことができる。〈わたし〉に左右されず、人間に世界のあり方を直接的に開示し、人間を深層の知へと導く「實在」を通じて、人間存在は成立し、「神」と交わるのである。

おわりに

従来の研究は、「實在」がシモーヌ・ヴェイユの思考の重要な対象の役割を演じてきたことを正しく捉えてきた。それにもかかわらず、シモーヌ・ヴェイユの思想全体の一貫した導き手として、また、その思想の読解の導き手として描く試みは断片的なままである。本稿は、ヴェイユの後期思想を概観しつつ、「實在」の位置と性質を整理することを目的としている。シモーヌ・ヴェイユの思想にとって、「實在」は人間存在の基盤として、人間存在の成立条件としての重要な役割を果たしていることが分かる。人間を満足させることも、飢えに引き渡すこともない「實在」のなかに生きる時、人間は〈わたし〉を自然的に養う水準以上の水準へと人間存在を導く。人間の死と生の闘ぎ合いの場として「實在」を通じて、人間存在は建て上げられる。〈わたし〉が死に絶え、「真空」となり、それゆえ「恩寵」以外によって人間が生きることができない状況に「實在」は表れる。「實在」は、超越的「次元」からの「神」の介入による人間存在の成立を主張しているのである。したがって、「實在」という言葉も、単なる表現としてではなく、シモーヌ・ヴェイユが用いる主要な概念にエネルギーを送り届ける中核的な存在の位置に置かれている。「實在」は「想像力」の専横の前に立ちはだかり、〈わたし〉を消滅させる「必然性」を示す存在として、「神」による世界の「創造」と、「創造」する「神」の超越性を映し出している。つまり、「實在」は世界の存在そのものを表現している。このように、ヴェイユの思想にとって、「實在」は欠かすことのできない存在の原初の間を展開しているということがわかる。それは人間存在と世界の存在そのものを建て上げ、展開させる。〈わたし〉から自由であり、その多層性によって人間の理性を世界、または、そこに存在する諸事物の奥深くへと導く「實在」は、人間的「次元」を離れたところで、シンプルに、強烈に真理を啓示する。「真理」、「絶対的な善」、「純粋なもの」、いかなる名で呼ばれるにせよ、世界の謎の果てを目指したシモーヌ・ヴェイユの思想全体の柱として、「實在」は提示されなければならないのだ。

-
- 1 本稿では、réalité を「現実」ではなく、人間の主観、知識、技術の状況に関わらない客観的な存在、あるいはそのような存在の様態という意味で、「実在」と訳している。「実在している」という形容詞については注 21、「実在性」との訳し分けについては注 29 を参照。
- 2 réalité が「現実」ではないことは、本稿において重要なことである。シモーヌ・ヴェイユは、社会や世界の状況から出発するのではなく、いかに réalité に到達するのかから出発するからである。
- 3 Laure Adler, *L'insoumise*, Arles, Actes Sud, 2008.
- 4 鈴木順子、『シモーヌ・ヴェイユ 犠牲の思想』、藤原書店、2012年、60頁。
- 5 村上吉男、『シモーヌ・ヴェイユ研究』、白馬書房、1980年、11頁。
- 6 同書、101-103頁。
- 7 同書、210頁。
- 8 同書、446-448頁。
- 9 Simone Weil, *La pesanteur et la grâce*, Paris, Plon, 2009, p.92.
- 10 *Ibid.*, p.73.
- 11 *Ibid.*, p.80.
- 12 *Ibid.*, p.93.
- 13 *Ibid.*, p.80.
- 14 *Ibid.*, p.54.
- 15 *Ibid.*, p.53.
- 16 *Ibid.*, p.47.
- 17 *Ibid.*, p.47.
- 18 *Ibid.*, p.51.
- 19 *Ibid.*, p.51.
- 20 *Ibid.*, p.62.
- 21 原語では、les objets reels である。「実在 réalité」の性質を持つことを示す形容詞として reel が用いられ、対義語では irreal が用いられる。また、「実在しているもの」を指して、le reel という表現も用いられる。
- 22 Weil, *op.cit.*, p.63.
- 23 *Ibid.*, p.51.
- 24 Lissa McCullough, *The Religious philosophy of Simone Weil*, L.B.Tauris, 2014, p.27.
- 25 *Ibid.*, p.29.
- 26 *Ibid.*, p.24.
- 27 *Ibid.*, p.22.
- 28 *Ibid.*, p.22.
- 29 原語では、réalité である。「実在 réalité」は、人間の主観の作用や思考に捉えられるか否かに関係なく存在している何か、および何らかのもののような存在の仕方を指しているが、réalité という語によって、その性質がとりわけ強調される文脈においては、「実在性」と訳出した。
- 30 Weil, *op.cit.*, p.59.
- 31 *Ibid.*, p.56.
- 32 *Ibid.*, p.58.

33 *Ibid.*, p.57.

34 *Ibid.*, p.57.

35 *Ibid.*, p.57.

36 *Ibid.*, p.65.

37 *Ibid.*, pp.65-66.

38 *Ibid.*, p.66.

39 *Ibid.*, p.66.

40 *Ibid.*, p.67.

41 *Ibid.*, p.56.

42 *Ibid.*, p.65.

43 *Ibid.*, p.66.

44 *Ibid.*, p.64.

45 *Ibid.*, pp.55-56.

46 *Ibid.*, p.55.

47 *Ibid.*, p.68.

48 *Ibid.*, p.71.

49 *Ibid.*, p.66.

50 *Ibid.*, pp.60-61.

51 *Ibid.*, p.72.

52 *Ibid.*, p.61.

53 ヴェイユは、幾つかの異なる表現を用いるが、ここでは *décréation* の訳である。

54 *Weil, op.cit.*, p.82.

55 *Ibid.*, p.82.

56 *Ibid.*, p.84.

57 *Ibid.*, p.56.

58 *Ibid.*, p.92.

59 *Ibid.*, p.94.

60 *Ibid.*, p.81.

61 *Ibid.*, p.96.

62 *Ibid.*, p.97.

63 *Ibid.*, p.97.

64 *Ibid.*, pp.97-98.

65 *Ibid.*, p.193.

66 *Ibid.*, p.103.

67 *Ibid.*, p.101.

68 *Ibid.*, p.98.

69 *Ibid.*, p.102.

70 *Ibid.*, p.102.

71 *Ibid.*, p.99.

72 *Compassion* の訳である。ヴェイユの思想において *miséricorde* との使い分けは不明確である。どちらも深く苦しみを共にするという意味で、しかも「神」と人間の関係を表現する場合にも、人間同

士の関係を表現する場合にも用いられる。

73 *Weil, op.cit.*, p.110.

74 *Ibid.*, p.54.

75 *Ibid.*, p.53.

76 *Ibid.*, p.106.

77 *Ibid.*, p.106.

78 *Ibid.*, p.106.

79 *Ibid.*, p.106.

80 *Ibid.*, p.107.

81 *Ibid.*, p.107.

82 *Ibid.*, p.108.

83 *Ibid.*, p.108.

84 *Ibid.*, p.108.

85 *Ibid.*, p.109.

86 *Ibid.*, p.109.

87 注 21 を参照。

88 *Weil, op.cit.*, p.110.

89 *Ibid.*, p.106.

90 *Ibid.*, p.106.

91 *Ibid.*, p.111.

92 *Ibid.*, p.111.

93 *Ibid.*, p.111.

94 *Ibid.*, p.111.

95 *Ibid.*, p.112.

96 *Ibid.*, p.110.

参考文献

Simone Weil, *La pesanteur et la Grâce*, Paris, Plon, coll. Agora, 2009.

Laure Adler, *L'insoumise*, Arles, Actes Sud, 2008.

Lissa McCullough, *The Religious phylosophy of Simone Weil*, L.B.Tauris, 2014.

今村純子、『シモーヌ・ヴェイユの詩学』、慶応義塾大学出版会、2010年。

シルヴィ・クルティエヌ＝ドゥナミ、『シモーヌ・ヴェイユ 天上の根を求めて』、庭田茂吉・落合芳
訳、萌書房、2013年。

鈴木順子、『シモーヌ・ヴェイユ 犠牲の思想』、藤原書店、2012年。

富原真弓、『シモーヌ・ヴェイユ 力の寓話』、青土社、2000年。

村上吉男、『シモーヌ・ヴェイユ研究』、白馬書房、1980年。